未来の森をつくる
木の家づくりプロジェクト

特定非営利活動法人 ななしんぼ［岐阜県郡（ぐじょう）上市］

団体設立の経緯

2011年秋、市主催で開催されたワークショップに、明宝で地域づくりに関わる人々約30名が集まりました。未来ある地域をつくるために、様々な課題やアイディアが出る中、最も支持を集めたのは「ヨソ者も交えて、もっと自由に話し合おう」。

これを受け2012年2月、住民主体の集いが開催。「MOSO（妄想）でいいから夢を語ろう。サケを飲みながら」… そんな想いを込めた「MOSO塾」に、地域内外から30名以上が集まり、地域の夢を語り合いました。第1回目のMOSO大賞、それは「地域の夢をカタチにする、妄想実現NPOをつくろう!」。

地域住民の想いから生まれた「中間支援組織ななしんぼ」。「ななしんぼ」とは明宝の言葉で「名前の無い者」。そのロゴマークは「黒子」に。人と人、人と自然――「つなぐ」をキーワードに、持続可能な地域の実現を目指し、地域の黒子として2012年9月、ななしんぼはNPO法人として活動を開始しました。

地域概要

岐阜県のほぼ中央部に位置する郡上市。全国有数の鮎釣りのメッカとなっている清流・長良川の源流域にあたり、市全体の90%を森林が占めています。7つの町村が合併して誕生した郡上市の中で、明宝地区（旧明宝村）は人口2,000人を割り、過疎に指定される、市内でも人口減少が著しい中山間地域です。

「明宝ハム」や「めいほうスキー場」など、村時代につくった第3セクターの努力で地域雇用を創出、人口流出にブレーキをかけていますが、行政職員は減り、地域で必要なサービスが維持できるのか、住民の将来に対する不安も大きくなっています。

一方、明宝地区ではB-1グランプリに出場する「めいほう鶏ちゃん研究会」など、地域住民がさまざまな団体をつくり、地域を元気にする活動をおこなっています。厳しい条件を抱えながらも、行政だけに頼らず、住民自らの手で明るく楽しく未来を創ろうとする「明宝スピリッツ」が今も引き継がれ、息づく地域です。

設立年月 ･･･2012 年 5 月 25 日設立　2012 年 9 月 6 日法人化
メンバー数 ･･･22 人
代表者名 ･･･ 西脇洋恵（にしわき・ひろえ）
連絡先 ･･･ 〒501-4307　岐阜県郡上市明宝二間手 361
☎ 0575-87-3799　meiho@nanashinbo.com　http://nanashinbo.com
団体のミッション ･･･ 人口 2 千人を割り、過疎化する郡上市明宝地域で、自立できる地域づくりを目指し、市民団体や都市住民、行政などをつなぐ中間支援組織として、コミュニティカフェの運営など、人がつながる場づくりを行なっています。

2013年12月22日、棟上げ。雪積もる静かな森の中に、人々のかけ声と掛矢（かけや）の音が響く。
素人大工の手で、地域の木が、家へと生まれ変わる。

活動に至った理由や背景

森林率70%と世界有数の森林大国である日本。その多くは戦後植えられたスギやヒノキなどの人工林です。しかし国産材価格の低迷などを受けて、多くの山林では間伐が遅れ、放置されています。山村でも人は森から離れ、森に関わる人は少なくなりました。

「昔は裏の山の木で、みんなで、家を建てたもんや」

——そう遠くない昔、森は家を建てる「材」としてはもちろん、「木の実」、「山菜」、「薪炭」、「獣肉」、そして「水」など、さまざまな恵みを里にもたらしてくれる場所でした。森と家や、人と人、人と自然は、しっかりとつながっていたのです。

裏山の木を使い「家」を建てることを通して、山里ではあたりまえであったこの「つながり」を学ぶ場をつくり、未来の子どもたちの資産となる「森」について考えたい——そんな想いから「森をつくる家づくり講座」をスタートしました。

山里のつながりを学び、未来の森をつくる。

森（山）とつながって
～生きてきた里の智恵を学ぶ

2013年夏、山の木を伐って、自力で家をつくり、伐った山を広葉樹の色づく森へと変えるプロジェクトが始まりました。

活動の拠点は、森と水の山里、岐阜県郡上市明宝。清流長良川に注ぐ支流・吉田川の上流域にある山里です。

古民家・源右衛門と栃尾の里をフィールドにして里山づくりをすすめる、ふるさと栃尾里山倶楽部は、「森」、「農」、「自然エネルギー」の3つのテーマで、都会の人たちの力も借りて、月に一回の里山づくり「栃尾里人塾」を行っています。

この塾を通して「森」について、多くの気づきがありました。この土地でも日本の多くの山村と同様に、過疎化や林業従事者の高齢化などがすすみ、先祖が植えてくれた未来のための「木」が、うまく活用されずに、場所によっては山の荒廃を招いているという問題を抱えていました。

里山倶楽部で描いた夢。先祖が紡いできた森（山）とつながって生きてきた智恵と技術を学びたい。それは、裏山の木を使って、小屋づくりを自分たちの手で……。夢が、だんだんと膨らんできたのです。

古民家・源右衛門の周りに植林されていた、スギの木が一斉に伐られることになりました。これらの木々は、いいものは建材となりますが、あとは、紙の材料や、合板のチップとなってしまいます。昔のように、この木で家づくりができたならば！　しかもその場で建てればウッドマイレージ0（ゼロ）の家！　こうしてプロジェクトの構想が練られ始めました。

岐阜は木の国、山の国
～智恵と技術を持つスペシャリストたち

まわりを見渡すと、地元はじめ、近隣に、「森」そして「木」に関するスペシャリストの方たちがたくさんいることに気が付きました。

ならば、この里に招き、ここを「森の学び場」に。日本屈指のログビルダー・関根潤一氏を郡上市高鷲町に訪ねたとき、その想いは一気にかたまりました。

「森を知る」「技術を学ぶ」家づくり講座スタート

2013年夏。山では、土用を過ぎた8月中旬から、約100本のスギの木が伐られ、葉をつけたまま、9月末まで「葉枯らし」をし、準備は着々と進みます。

8月24日、岐阜県の助成事業を活用した【基礎編】がスタート。まずは、実践編の講師、関根潤一氏の建てた、郡上市高鷲地域のログハウスを見学しました。参加者は、近年の日本での住宅建築の常識とは違う、柔軟さ、自由度の高さと、木と対話しながらハンドメイドでつくる手法に、魅了されました。

次いで、明宝地域に戻り、森の伐採見学を行いました。地元、明宝山里研究会の原幹雄氏を講師に迎え、50年生のスギ伐倒を見学。木材としてよい木の見分け方、木材価格の低迷から、山主にお金が残らない現状などのレクチャーを受けました。一方で、ログ業界の視点から見ると、使う側の意識次第で、安価なために市場には出ていかない木材でも十分活かすことが可能であるということを知りました。

続く9月14日に開催された【基礎編】第3回では、「森の名人」でもあり、林業の現場に立たれている地元の講師、くさかべ林業の日下部修氏を招き、ログハウスづくりに欠かせない道具、チェーンソーの構造と使い方、メンテナンスを学びました。

翌9月15日は、明宝山里研究会・副会長の熊崎弘一氏による、ログハウスを実際に建てる現場の木の伐倒講習。12本の木を実際に伐り倒し、枝払い、切り株を整えるなど、林内をきれいにしていく作業も行いました。立っている木を伐ることは予想以上に難しく、見事かかり木になり倒れない木も。そんな時、講師がチェーンソーの刃を軽く入れただけで、びくともしなかった大木が、ぐるりと回って大きな音を立てて地面に落ちる様子に、感嘆の声があがりました。

9月21日、いよいよログハウスのための丸太の加工がスタート。今回は、柱（ポスト）＆梁（ビーム）構法で建てていきます。伐採した森からほど近い土場を借り、伐り出した丸太の皮を人力でむき、チェーンソーでの加工など、2ヵ月間作業が続きます。

こどもたちと一緒に未来の森をつくる「ドングリ拾いと苗木づくり」

基礎編のテーマは「森を知る」こと。このため、森とのつながりを深める二つの座学と、親子で参加できるワークショップも企画しました。

座学は、岐阜県立森林文化アカデミーの教授でもあり、「森の案内人」としても活躍している川尻秀樹氏から、『神話から森話へ』と題し、日本人と山とのつながりについて話を聞きました。また、郡上割り箸株式会社を起業された、大原林産代表取締役、小森胤樹氏からは、『森の現状、未来へのチャレンジ』と題し、林業の未来について語っていただきました。

10月27日、親子で参加できるプログラムも同時に開催しました。主に、地元や、講座参加者の家族などに声がけし、明宝地域の広葉樹の森で行った「親子で楽しむ

ドングリ拾いと苗木づくり」では、山のネズミとドングリの関係をわかりやすく解説したアニメを作成。岐阜県立森林文化アカデミー准教授　柳沢直先生に、苗木づくりについて教わりました。

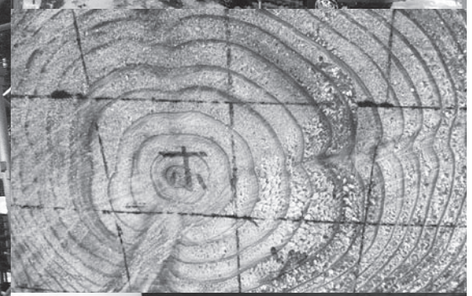
こうして終了した基礎講座および「ドングリ拾い」では、延べ181人のみなさんが参加されました。

自分の手で木に新しい命を吹き込む

～木と向き合う家づくり

10月12日、いよいよログハウスを実践的につくる「広葉樹の森をつくる家づくり講座【実践編】」がスタート。【基礎編】から通ってくれた参加者のうち、7名のみなさんが一括で全講座を申し込まれました。ななしんぼスタッフや、ふるさと栃尾里山倶楽部のメンバーなども加わり、学びは続きます。遠くは、京都、愛知、岐阜県東部などから毎週末通っていただきました。参加者のみなさんは、「自分で小屋を建てたい」、「自分の山の木を使いたい」、「道具の使い方を覚えたい」など、真剣に取り組まれる方ばかり。積極的に道具を使ってどんどんスキルアップしていきます。

ホゾ加工など高度な加工もこなしなが



ら、12月の棟上げを目指し、間に合わない部分はエキストラの回も設けて木を刻みました。

地元のみなさんも、週末ごとに行われる作業に足を運んでくださいました。「昔の家のつくり方と同じやなぁ」と関心をもってさまざまな話をしてくださいました。なかでもこの地域で、復活した伝統的な拝殿踊り（盆踊り）のなかに、唄われている「どじょ」は、この辺りで新家を建てるときに、近所中が集まって、土がためをするときに唄われたものだというお話も伺うことができました。

「結」の力

～熱気あふれる棟上げ

年も押し迫った12月22日、雪の舞うなか行われた「棟上げ」には、地元の大工さんや、土木関係、林業関係のみなさんも集まってくださり、まるでお祭りのような熱気のなかで行われました。あんなにきちんと計ってつくったはずのホゾ穴に柱が入らず、力技で入れていく！　そんな場面も。

餅まきの準備や料理をななしんぼ会員のみなさんが担当してくださり、結でかけつけてくださったみなさんへのねぎらいの会「あとふき」を開催することができました。

【実践篇】講座の、参加者は計14日間、延111名。「裏山の木をつかった家づくり」という大きな目標に、一体となってものづくりに励んだ者達は、新しい「仲間」となりました。

よき参加者に恵まれ、無事成功した講座ではありましたが、家づくりということで、整地や基礎、丁張り、電気や浄化槽など講座以外の段取りごとも思った以上に多く、地主さんや、地元協力者、そして、ふるさと栃尾里山倶楽部のメンバーの智恵と力なくしては、進まないことばかりでした。

かつてそうであった、家づくりの「結」の力を改めて痛感し、スタッフ側も多くのことを学びました。身近な山の木を伐って挑んだ、家づくり。困難も多かったですが、みんなでやるとこんなにも楽しい

……それが私たちの感想です。

今後の予定

未来へのメッセージ
～「土に還る家づくり」を目指して

人が住めるゲストハウスを目指して、家づくりが進んでいます。大きな課題のひとつは資金。建築コストの中で、家の骨組みの数倍が、水回りや電気などの設備にかかるのです。

では昔ながらに地域の材料と知恵を活かし、できるだけコストをかけないようにしたいところですが、そうすると人手と時間がかかります。

「コストとスピード」が優先され、時間をかけて造り上げることが難しくなった現代社会の課題を、家づくりを通してあらためて考えさせられます。

そんな「コストとスピード」の狭間に悩みながら、将来に負担を与えない、「できるだけ土に還る家づくり」を目指していきます。そのため昔の知恵や天然素材を使った断熱、木や土壁などの活用も、勉強しながら導入していきたいです。

みんなで学ぶ場づくり

現在の作業は高所作業や電動工具の使用があり、一般の方の参加が難しいのですが、今後内装などの作業を通して、できるだけ地元の方やこども達も参加できる場をつくり、家づくりを通して森のことを感じ、考えられる機会を多くつくっていきたいです。

またログハウスが建つのは電気や水道、下水がない森の中。まず水を引くことも、貴重な経験になるでしょう。そのほかバイオマストイレや水力発電、薪ストーブなど、森の中で自立できる「アンプラグドな家」を研究できる場として、多くの人びとが訪れ、いっしょに考えられる場になることを望んでいます。

こども達が森と関わる場所へ

そして「人が住める家」ができたら、次は森の暮らしを体験できる「栃尾のゲストハウス」として整備していきます。まずはゲストハウス周辺に苗木畑をつくり、昨年の「ドングリ拾いワークショップ」でこども達が育てたコナラを植えたいです。人々が森でドングリを拾い、家で育て、大きくなったら森をまた訪れる　――　森と人がつながり、循環する「森の入り口」として深化させていきたいです。